

「税」。私は、その単語にあまり良いイメージを持てなかった。無駄なことでは無いという事はわかっていたが、未成年の私にとって、税の使われ方は指で数えることができる程度しか知らなかった。このまま成人を四年後に迎えることは良くないと思い、資料を読みながら「税が無い世界」を想像してみた。まず、義務教育を九年間受けるだけで最低でも、約二百五十万円もの金額を家庭で負担しなければならないことがわかった。私には一人、弟がいるので、二人合わせて約五百万円、さらに高校、大学へと進学するとなると合計して一千万円もの負担がかかってしまう。これほど多額の負担となれば、間違いなく今までも、これからも今と同じ生活を送ることはできない。もしかしたら、決められた道にしか進むことができないかもしれない。そのことを考えるだけで気が狂いそうになる。教育以外の身の周りの税の使われ方として、道路や病院、公園などの公共施設の整備や、安全な食品を作るための支援や、上下水道の整備にも税が使われていることがわかった。これらは、私たちの生活と切っても切り離せない存在だ。今日も、安全な水と食事で支度を済ませ、舗装された道を歩いて部活に行き、小さい子供が楽しめる公園の横を歩いて帰宅し、世界に誇れる水道水を飲む。この平凡な日常の中のどれか一つでも安全でなくなってしまうと、すべての安心、安全が保てなくなってしまうだろう。そうなれば、日本も、粉争や戦争に続がらねない。そうでもなれば、それこそ気が狂うだろうし、死と直面することが日常茶飯事になるのではないかと思うと心臓が凍りつきそうになる。

これらのことから「税」とは、日常生活の基盤であり、当たり前を支えているものだと思う。そして、大局的な視点で見なければ本当のありがたさを知ることができないものだと思う。

このコロナ禍で「当たり前」がどれだけ幸せかを知った。しかし、知ったのは、当たり前が崩れてからだった。なので、当たりの日常に感謝も、大切にすることもできなかったことに後悔をしている。今後、同じ後悔をしないためにも、税を始めとする政治に積極的に参加したいと思う。